

「アブラハムと王たち」 (創世記一四章一〜二四節)

1 ロトの危機

今日の聖書箇所、創世記第一四章、いまお読みしましたけれど、とてもつかみにくいと思われたかも知れません。耳慣れない人の名前、国、あるいは土地の名前が多く出てきます。

いま私どもがその生涯を辿っているのはアブラハムです。それはこの一四章の後半になって出てきます。前半は飛ばしてもいいのですが、理解しにくくなるといけませんので、前半は、私の言葉で、前の章、一三章にまで遡って、少し説明しておきたいと思えます。

エジプトからカナンの地へ戻ってきたアブラハム。甥のロトも一緒です。幼かった彼はもう一人前の大人でした。二つの大家族が、カナンの地で、前にも申し上げましたけれど、半農半牧の生活を始めていたのです。二家族合わせて千人ほどはいたと考えられます。

これだけの人が暮らすのに、彼らの寄留した、カナン地方、ベテルとアイの間の土地は狭かったのです。先週見たように、アブラハムとロト、この二人の間にはありませんが、彼らの羊飼いたちの間で、争い、諍いが起こったというのです。土地が狭いことで起こったことなので、アブラハムは、甥のロトに、ここで別れて、別々の土地で暮らそうと提案します。アブラハムはこう言います。「あなたが左に行くならわたしは右に行こう、あなたが右に行くなら、私は左に行こう」(一三・九)。ロトに好きな土地を選ばせます。自分は、その後、ロトが選ばなかった場所、残っているとここに住むと言うのです。

ロトが選んだのは、ヨルダン川流域の低地地帯でした。カナン中央部と違って水の豊かな地域です。見渡すかぎり潤っていて、まるでエデンの園のように見えたというのです。

低地地帯を選んだロトは、低地の町々に住んだようですが、最終的には、その中心都市ソドムに天幕を移しています。かつてのソドムの町は、いまは、死海南部の湖底に沈んでしまっているようです。

ロトが低地に移動して行ったので、アブラハムは、そのままカナンの高地に残りません。今日の聖書箇所が伝える出来事があったとき、一四章一三節によれば、アブラハムは、ベテルより更に南のヘbron、その近くの「マムレの櫟の木の傍らに住んでいた」と記されています。

こうしてアブラハムとロト、かつてユーフラテス川のほとりハランから、神の召しに従って、見知らぬ土地にまではるばる旅してきた二人の親族は、いま別れ別れに暮らすことを余儀なくされたのです。

今日の私どもの聖書、それは、この二家族も、自分たちの幸福を直ちに追い求めて過ごすわけにはいかなかった、彼らのファミリー・ヒストリーも、時代の、世界の大きな出来事、大きな渦の中に巻き込まれていかざるをえなかったことを、私どもに伝えていきます。ソドムの町が襲われてロトも捕らえられます。

シデイムの谷には至るところに天然アスファルトの穴があった。ソドムとゴモラの王は逃げる時、その穴に落ちた。残りの王は山へ逃れた。ソドムとゴモラの財産や食糧はすべて奪い去られ、ソドムに住んでいたアブラムの甥ロトも、財産もろとも連れ去られた(一〇〜一二節)。

今日の箇所にはたくさん王の名前が出てきます。十数人出てきます。一人一人について詳しいことは、はっきり言って、ほとんど分かっていないようです。

ただ、一つの大きな対立があったことははっきりしています。一方には、北の、強力な、メソポタミアの大国の諸王たちがいました。その中心人物は、ケドルラオメルです。彼の周りに、四人の王がいます。

他方には、それら大国の支配下に置かれていた、一地方にすぎないカナン、そしてヨルダン低地地帯、その諸都市の王たちがいたのです。ソドムの王もゴモラの王もその一人です。みな弱小なため、同盟を結んで(三節)、大国に対抗しています。こちらの王は五人です。この五人の王が、あの四人のメソポタミアの大国の王たちに対抗するという構図です。

いまお読みした一〇節以下のところを見ると、これら弱小の同盟国は、大国の四人の王との戦いに敗れ、王たちはみな敗走し、一部は、天然アスファルトの穴に、たぶんどろろと落ちて逃げた。残りは山に逃れた、とあります。財産も食糧もみな奪われたのです。ソドムに住んでいたロトも、その町の運命から超然としてるわけにはいきませんでした。彼も戦いに出たのか出なかったのか、分かりませんが、財産だけでなく、ロト自身が捕虜として連れ去られてしまったのです。

2 追跡と勝利

このロトが遭遇している大変な危機、これは私どもも含めて人間の遭遇する危機でもあるように思います。

ロトは、アブラハムに促され、自分の気に入る土地を選択しました。聖書は、その選択が、きわめて表面的な、つまり見た目にたよった浅はかな選択だったような書き方をすでにしています。しかし、だからこうなったというような見方は、聖書はしていません。

それと同じく私どもも、いろいろ考えて、いつも正しい選択をしているわけではありません。いつもと言って言いすぎでないほど、間違った選択をします。それだけでなく、時代と世界のただ中で、思いもかけない出来事に遭い、翻弄されて生きているのが私どもです。

甥のロトは、アブラハムの目には、少し危なっかしい存在に見えていただろうと思います。ロトがヨルダン低地を選んだとき、もちろん心配しないことはなかったと思いますけれど、余計なことは何も言っていないです。

とはいえ、アブラハムが別れた甥のロトのことをどれほど気遣っていたか、ヨルダン低地の同盟が破れて、ソドムに住んでいたロトも捕虜になったとの情報もたらされたとき(一三節)、直ちに、手勢を整えて、自ら先頭に立って救出に向かったところに表れています。

アブラムは、親族の者が捕虜になったと聞いて、彼の家で生まれた奴隷で、訓練を受けた者三百十八人を召集し、ダンまで追跡した。夜、彼と僕たちは分かれて敵を襲い、ダマスコの北のホバまで追跡した。アブラムはすべての財産を取り返し、親族のロトとその財産、女たちやそのほかの人々も取り戻した（一四〇―一六節）。

少し驚くのは、三一八人という数字です。訓練を受けていたとは言え、これでは相手のこと、強大な大国の諸王を相手にすることを、考えると、あまりに少ないのではないかということですが。

そんなこと関係ないと言っても言うように、直ぐに出発します。ここに上がっている町の名、ダン、さらにダマスコの北のホバなど、地図で確認すると、相当の距離になります。これも驚きです。夜襲をかけ、挟み撃ちして敵を襲うなど、戦術のかぎりを尽くしたことが推察されます。

アブラムは堂々と勝利します。すべての財産を取り返し、ロトとその財産、女たちやそのほかの人々も取り戻したのです。こうしたアブラムを見ると、むしろこれは神の指示によって、神の支えによってなされたと思いか言いようがないと思います。神がロトを苦境から救ってくださったのです。間違った選択をしたなどと、問うことはありません。主なる神は救ってくださいました。アブラムを用いて、ロトを助けてくださったのです。

ところで、この章で、聖書でははじめて、「戦い」という言葉が出てきます。争いはありました。アブラムとロトの羊飼いの間の争い、諍いについては、さつきも触れた通りです。

人間の生活において、争いは、それはないに越したことはないけれど、なくならない。良い悪いの問題ではないと先週も申し上げました。人が生きていくとき、必ずそこに争いは、大なり小なり、生じるものです。それなら戦いについても、同じことを私どもは言ってよい、言うべきなのでしょう。一般的に何かを言うことはできませんが、正義が脅かされ、生命が危険にさらされる、これを神は決して見過ごしにされないのです。神は救って下さる、助けて下さる。アブラムは覇権を求めて出兵したわけにはありません。取り戻すため、救い出すための戦いに出たのです。

3 神の戦い

戦いに臨んだアブラムのこと、更に別の面から、私どもは知らなければならぬと思えます。

アブラムが、あの大国の四人の王、その総大将ケドルラオメルを撃破して、ロトとその財産、女たち、その他の人々を連れて帰ってきたとき、二人の王が迎えに出たというのです。

一人は、ソドムの王です。彼が迎え出るのは当然です。もう一人はメルキゼデクという、聖書の説明では、「いと高き神の祭司であったサレムの王」（一七節）です。サレムとはエルサレムのことのようにですが、このメルキゼデクは新約聖書でイエス・キリストを予め指し示していた王にして祭司として、ヘブライ人の手紙で詳しく書か

れることになる、謎めいた、しかしきわめて重要な人物です。彼とアブラハムとの関係のほうが、ソドムの王とアブラハムとの関係より、本来大切なのですが、今日はそれには触れず、いつかお話すことにして、ソドム王とアブラハムとのやりとりを取りあげたいと思います。

今日の箇所の後半、一七節以下によれば、一方でメルキゼデクがパンとぶどう酒をもつてきてアブラハム一行を労い、なおかつ祝福したのに対して、ソドムの王はぶつさらぼうにこう言ったということです。

人はわたしにお返しください。しかし、財産はお取り下さい（二二節）。

これに対してアブラハムはこう答えます。

わたしは、天地の造り主、いと高き神、主に手を上げて誓います。あなたの物はたとえ糸一筋、靴ひも一本でも、決していただきません。「アブラムを裕福にしたのは、このわたしだ」と、あなたに言われたくありません。わたしは何も要りません。ただ、若い者たちが食べたものと、わたしと共に戦った人びと、すなわち、アネルとエシユコルとマムレの分は別です。彼らには分け前を取らせてください」（二二〜二四節）。

アブラハムを迎えたメルキゼデクに比べても、ソドムの王の言葉は高慢で礼を失っています。半農半牧の、さすらいの部族を、ソドムの町の人たちはふだんから蔑んでいた、その彼らに助けられたのですから、面白くないのは当たり前です。

アブラハムの返答は理解できます。ソドム王の申し出を拒否します。彼がもし、そうですか、などと、「財産」を自分のものとしていたら、結局この戦いは、自分の利益のための、権力のための、戦争のようなものとなつたのではないのでしょうか。

アブラハムは、このロトの救出をそのような戦いとは考えていないのです。彼は戦争をしに行ったのではない。救いのための神の戦いです。ロトが捕まった知らせを聞いて、直ちに出て行ったことを、私どもは聞きました。彼は神の戦いに出て行ったのです。

アブラハム、メルキゼデクに持ち物の十分の一を贈ったアブラハム、このアブラハムに、私どもは、教会を重ねて見てよいと思います。アブラハムのここでの戦い、それは今日の私どもの宣教の戦い、霊的な戦いを示しているようにも思います。覇権を求めての戦いではありません。財産のための戦いでもありません。神を証しし、イエス・キリストの十字架の死と復活によってみなが罪とその恐れから救い出された、そのことを宣べ伝えて、神のために人を救い出すための戦いです。その私どもに必要なのは、アブラハムにとってそうであったように、人ではないし、財産でもない。なるほど私どもには、アブラハムにとってと同じく、わずかな兵力しかありません。しかし必要なのは、神のみ頼りとする信仰です。ここでもまた、アブラハムは、私どもの信仰の父なのです。